

## イースターメッセージ

### 「私にとっての復活の恵み」

#### コリントの信徒への手紙 一 15章12～20節

牧師 田口 昭典

イースターの説教依頼を受け、投稿することとなった。今まで「説教は消えて無くなるもの」との考えのもと、説教原稿は基本的に廃棄してきた。まずい説教がいつまでも残るのは耐えられない。自分の説教は2度と見ないし、聞かない。説教が終われば、穴を掘って入りたい時もしばしばある。

説教は「生物（なまもの）」なので、一回一回が勝負だと考えてきたし、自分の仕える教会のためだけを考慮して説教してきた。だから、説教原稿を不特定多数の方々の目に晒すことはとても考えられないことである。あえて言えば、とても恐ろしいことである。自分の仕えている教会では、信仰の交換があり、祈りの交流がある。だから間違いも失敗もカバーされ、許されてきた。安心して自分自身をさらけ出してきた。しかし、今回、自分の不信仰、不勉強が露わになることについては、正直「恐ろしい」と感じる。それは私が語ろうとする内容が実にキリスト教信仰の中心の関心事であり、様々に議論されてきた事柄であれば、なおさら恐ろしいのである。

私はこの恐ろしいことを引き受けてしまった。神の聖霊がこの説教を読まれる一人ひとりにとって何らかのメッセージに整えてくださることを期待し、切に祈っている。もう一つの動機は、先ごろ私の敬愛する矢野 満先生が天に召されたことである。そのことが私にこの奉仕を促してくれた。彼の優しさと誠実さ、そして仕事の美しさは誰もが認めるところである。連盟事務所で私が宣教部主事として働いた時、一緒に祈り、テニスをし、一緒にスキーに行き、また議論もした同労者であった。彼への感謝の思いを込めて、また必ずや天国で再会するであろうことを信じて説教を準備した。と言っても、いつものことながらやつつけ仕事である。特に今回は準備の時間はなく、釈義もメモも何もなしに、直接パソコンに向かいキーボードを叩いた。打っては止まり、読み返し、黙想をし、また打ち込む。聖書を読んで、黙想し、また聖書を読み直して黙想し、という繰り返しの中でこの説教を準備した。とてもいい経験をさせていただいた。

私は、この説教でも普段通り、正直に私の信じていることを語る。それ以外ではない。文献を読み漁って、良い解説や説明をしようとも思わない。私が信じている主イエス・キリストを伝えたいと思う。私の祈りを聞き、私と共に歩いてくださる主イエス・キリストを証ししたいと思う。バプテスマを受けて47年、献身して42年、牧師として歩みだして38年の、引退間近の牧師の信仰告白と思っ

て読んでいただければ幸いである。

1971年、私は北海道釧路市から神奈川県大和市に移り住みました。20歳で工業高専を卒業し、親元を離れ、外資系のコンピューターメーカーの生産技術者として就職しました。求人募集の中で初任給が一番高かったし、土日が完全に休みであることも魅力的でした。そして、驚くことにボーナスは夏4ヶ月、冬4ヶ月で年間8ヶ月も出ていました。にもかかわらず、私は憂鬱<sup>ゆううつ</sup>な毎日を送っていました。慣れない仕事で神経をすり減らし、飛び交う英語に悩まされ、人間関係の軋轢から極度のノイローゼ状態に陥ってしまいました。会社に行かなければならぬのに得<sup>え</sup>体の知れない不安に囲まれ、体が動かない日々の連続でした。

毎日毎日、出社門限ギリギリにタクシーで乗り付け、遅刻直前の時間にタイムカードを打刻する日々が続きました。土曜日は気を紛らわすために寄席に、そして日曜日は教会へ通い、なんとか1週間をもたせるといった生活でした。半年間の求道生活を経て、1971年12月5日、私は信仰告白をし、相模伝道所（現相模中央教会）で故松田正三先生からバプテスマを授けていただきました。私は苦しみ悩みの中から主のみ名を呼びました。「助けてください」と。その当時の私の祈りは実に慎<sup>つつし</sup>ましいものでした。

「神様、私は何もわかりません。よろしく願います」から始まり、「神様、私は何も要りません。お金も物も、地位も名誉も財産も何もありません。でも、1日を終えて床に就くとき、安心して眠ることができるようにしてください。死ぬとき、生きていてよかったと言える人生でありますように。給料も安く構いません。休みが少なくなっても構いません。ボーナスがなくなってもいいです。でも、やりがいのある仕事を与えてください」という祈りを繰り返していました。おかしな祈りだと思うでしょう。しかし、真剣な祈りでした。偽りのない祈りでした。後日談ですが、神はこの祈りに答えて、私を献身の道に導かれました。

私には淡い期待がありました。バプテスマを受けたら、この苦しい状況から解放されるのではないかという期待です。神の特別な力が注がれることを期待していました。しかし、幸か不幸か、神がかった奇跡は起こりませんでした。状況が劇的に変わることはなかったのです。しかし、明確に変わったことが一つありました。それは「お前はイエス・キリストに救われたのだから大丈夫だ。イエス様に任せたのだから、もう悩まなくていい」という思いが心棒のように私の中に入ってきたのです。21歳になったばかりの私はこの時から、「キリストと共に生きる」ということを自覚しました。私のこの思いはずーとなくならずに、今も私を支えています。

私はしばしば思う時があります。死を恐れた弟子たちが、復活を経験して死も恐れず大胆に語り出したのとはほんの僅<sup>わず</sup>かだけれど私の経験は似ているなあと。私は礼拝と祈祷会のメッセージ、教会の皆様のお祈りと交わりの中で少しずつ、自分を取り戻して行きました。

私は会社を辞めたい、死にたい、と言って母を悩ませました。母は心配のあまり心を病み、一時期、市立病院の精神科に入院しなければならなくなってしまうほどでした。そして非常にはっきりと自覚したことがありました。それは、「もう大丈夫。心配しなくてもいい。失敗しても間違っても全く問題ない。人が何と言おうと思おうと、心配しなくていい。私はキリストのものになったのだから、キリストが責任を取ってくれるのだから。主が、尻拭いしてくれるから大丈夫」。これが私の信仰に

なりました。

私の救いの実感は、「私は私でいい」というものでした。それは言い方を変えれば、私の生まれ変わりであり、私が新しく作られる経験でした。古い自分が死んで新しい自分に変えられる。キリストに背負われ、担われている自分を自覚しました。じわっと深い喜びがありました。

使徒パウロは復活のキリストに遭遇するとことによって、キリスト教迫害者からキリスト教伝道者へと変えられた人です。使徒言行録には3回もその様子が記されています。また、彼の書簡には、彼が経験したキリストの復活が生き生きと記されています。パウロは、復活者である主イエスの召しにより異邦人への伝道者となります。彼は伝道者としての生涯を通して多くの苦難を経験しました。II コリント 11:16~29 を読んでみますと、そこには、並々ならぬパウロの苦難に満ちた人生が<sup>ひれき</sup>披露されています。「・・・死ぬような目に<sup>あ</sup>遭ったことも<sup>たびたび</sup>度々でした。ユダヤ人から40に1つ足りない鞭<sup>むち</sup>を受けたことが5度。・・・」。40回鞭打ちにすれば死ぬ危険性があったのです。彼が経験した命の危険、迫害の数々を見るとき、どうしてこんな危険を冒してまで伝道するのか？と誰もが不思議に思うでしょう。パウロが復活の主<sup>あ</sup>に遭遇したこと、その事実が彼の全ての認識を新しくし、あらゆる困難を乗り越えさせる力となったのです。

第一コリント 15 章では、彼自身、復活信仰を受け継いだと語られています。また、その復活信仰が彼の宣教活動の根拠であり、信仰の土台、基盤であると言っています。さらに、彼は伝承に自分の経験を付け加えています。復活の主は、私にも現れた！と。パウロにとって大切なことは、個人々の救いとキリストの復活がしっかりと結びついていることです。だから、イエスの十字架の死（苦難）と死人の中からの復活は、教会の土台なのです。彼が受け継いだ原始教会に成立した復活信仰は、キリストが私たちの罪のために死んだこと、墓に葬られたこと、そして三日目に復活したことです。これが動かしがたい事実であり、土台なのであり、パウロの宣教の核となるものなのです。さらにパウロは、復活の主の顕現を経験した使徒たちや今も生きている証人たちがたくさんおり、確認したいと思えばすることができる<sup>あ</sup>ときと言っています。

また、パウロは、I コリント 15:12 以降で、教会内において「死者の復活」を否定する人々がいることに触れ、神は「死者の復活」を定めており、人間は皆復活するのだ、という彼の復活理解を展開しています。キリストの復活は、その意味内容が特別なのであり、死者の復活そのものは決して特別なことではない、とさえ主張しているように思われます。すなわち、人は皆復活する。それゆえ、イエスも復活した。人が復活しないのなら、キリストも復活しないのだ、と言います。それゆえ、キリストの復活はその後に続く私たち一人ひとりにとっての希望となるのです。復活を否定することは、罪の赦<sup>ゆる</sup>しの否定になり、キリスト教信仰から希望をとってしまうことであり、信仰そのものが<sup>むな</sup>虚しいもの、空虚なものとなるのだと主張しています。そして、彼は復活の大宣言をします。「実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂とされました」と。

キリスト教会も新約聖書もキリストの復活から始まったのです。そして、キリストの復活は証明できるものではないのです。私たちはただ信じ、使徒に聞き、聖書に聞くだけです。言い換えれば、復活信仰は聞いて、信じて、それに従って生きてみて、それで確信できるものなのです。信じて歩みだ

して、その事実を確認するのです。

ちょっと横道にそれ、理屈っぽくなることを許してください。パウロは「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えない」（Iコリント 12:3）と言っています。聖霊とは、私たちの中に宿り、私たちの中で生きて働き、私たちをご自身の祝福に満ちた歩みへと導き助けてくださる神そのものなのです。だから、パウロは、罪深い私たちに向かって、「あなたがたは聖霊の宮だ」と言うことができたのです。そして、このことを復活の視点で考えるとき、キリストの復活が私たち一人ひとりにとって恵みとなり力となるのは、イエスの十字架と復活、そして聖霊降臨の三つが神のみ手の中で、私たちに命をもたらす恵みとして働くからなのです。神が聖霊として、私たちをご自身の住まいとして宿られているのだとパウロは言います。内住ないじゆうのキリストである聖霊が、み言葉と共に働いて、とりなしをしてくださるのです。そのようにみ言葉通りに信じる時、私に安心と勇気が湧き上がるのです。復活の真実は、命の恵みです。私が命と言う時、それは私の中であって生きて働かれる神ご自身なのです。神の息である聖霊が人を生かし、新しくその人を創造するのである。創造者である神は、その聖霊によって教会を作る。世の終わりまで共にいると約束されたイエスの聖霊は、神が選んだ人々を結び合わせ、あらゆる違いを乗り越えて神の教会を形成させてくださるのです。